

転生したらあーしさん
が幼馴染だった件

御米粒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺ガイルの世界に転生したオリ主があーしさんとセックスしまくるお話

目次

転生したらあーしさんが幼馴染だった件	1
あーしさんが淫乱すぎて遅刻が確定した件	15
あーしさんをいじめたくなつたので学校のトイレで喉奥を犯しまくつた件	31
雪ノ下に泣かされたあーしさんを慰めセックスしてあげる件	47
あーしさんがなんでも言うことを聞いてくれた件	66

転生したらあーしさんが幼馴染だった件

桜舞い散る季節。俺は人生で2度目となる高校2年生になった。ちなみに留年したわけではない。2度目の高校2年を迎えた理由。それは俺が転生者だからだ。

前世でトラックに轢かれて死んだと思ったら、赤ん坊になっていた。

転生先はすぐにわかった。

『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』

俺が生前愛読していたラノベである。

生まれてすぐに両親に従兄弟を紹介されたのだが、その従兄弟が『俺ガイル』の主人公である比企谷八幡だった。

ここで初めて、『俺ガイル』の世界に転生したのだと気づいた。

なので八幡とは16年以上の付き合い合いとなる。俺たちの2年後に生まれた小町を含めて三人でよく遊んで少年時代を過ごした。

原作主人公の親戚というポジションに生まれた俺だが、比企谷兄妹以外にも原作キャラと深い関係になることになる。

幼稚園に入園するタイミングで、ある家族が隣の空き家に引っ越してきた。その家族

の娘が俺がよく知る人物だったのだ。

三浦優美子^{みうら ゆみこ}。

総武高では八幡のクラスメイトで、トップカーストに君臨する女王だ。

八幡や読者からは『あーしさん』と呼ばれており、俺も何気に好きだったキャラクターだ。

両家の親が仲良くなったこともあり、必然的に俺たちも親しい間柄になった。

小さい頃の優美子は、現在では考えられないほど大人しく、よく男子にいじめられて泣いていた。

いじめられていた原因は、好きな女子を男子たちがからかうという、可愛らしいものだった。

優美子は大きくなるにつれて、精神的に強くなっていった。

ただ泣き虫なのは相変わらずで、友達と喧嘩したり、運動会で負けたりすると、俺に慰められていた。

中学に上がると、俺はバレー部、優美子はソフトテニス部に入部し、お互い部活動に勤しんだ。

美少女に成長した優美子は、男子たちによく告白されるようになったが、告白はすべて断っていた。ちなみに俺は中学3年間で一回も告白されることはなかった。バレー

部のエースだったのに……。

部活動を引退すると、俺たちは一緒に受験勉強をするようになった。

志望校はもちろん総武高校だ。

優美子は余裕で合格できる成績だったが、俺は合格ラインギリギリだったので、優美子に教わりながら必死に勉強をした。

そのおかげで二人とも合格を果たし、晴れて総武高校に入学することになった。

受験も終わった中3の春休み。海外赴任が決まっていた父親が渡米した。母親も父一人だと不安だということで、俺を置いて渡米してしまった。

子供より父親を心配するのはどうかと思ったが、一人暮らしが満喫できるので、気持ちよく母親を見送った。

両親の渡米後、一人の時間が増えると思ったが、そんなことはなかった。

優美子が毎日自宅に来るようになった。

どうやら母親に俺の面倒を見るよう頼まれたようで、まるで通い妻のように、甲斐甲斐しく家事などをしてくれるようになった。

原作では不明だったが、優美子の料理はとても美味しく、俺の胃袋はすぐに握られてしまった。

入学式の一週間前。優美子が金髪になった。黒髪の優美子も可愛かったが、やはり金

髪の方がしつくりくる。

俺が金髪を褒めると、優美子は顔を真っ赤にして照れていた。

ピアツサーで穴を空けてあげようか提案すると、「痛いのだ」と言って泣いてしまったのも可愛かった。

高校に入学した俺と優美子は同じクラスになった。原作と同じく由比ヶ浜の犬を庇って車に轢かれた八幡は隣のクラスだった。

入院した八幡のお見舞いに行こうとしたところ、優美子もついてくることになった。

俺の従兄弟だということもあるが、どうやら善行をした八幡に好印象を抱いたようで、自分を紹介してほしいとお願いをされたのだ。

優美子と対面した八幡は、しどろもどろになりながらも、なんとか会話を成立させていた。

原作にはないイベントだったが、優美子との関係を持てたのは八幡にとってプラスになるだろう。

俺と優美子の関係が幼馴染から恋人に変わったのは高一の夏休みだった。

八幡と二人で映画に行った俺が自宅に帰ると、優美子が俺の枕を使用してオナニーをしているのを目撃してしまった。

恥ずかしいところを目撃されてしまった優美子は泣き崩れてしまった。

何度も「ごめんなさい」「嫌いにならないで」を繰り返し、優美子が落ち着くまで一時間もかかった。

泣き止んだ優美子に訊いたところ、俺の母親に合鍵を渡されてから、俺に隠れてオナニーをするようになったらしい。俺の匂いがするものなら何でもいいようで、枕以外にも制服、私服、下着などをおかずにして自分を慰めていたとのことだった。

優美子が俺に好意を持っているのは知っていたが、隠れてオナニーをしているとは思わなかった。

もちろん俺は優美子を許した。

優美子は俺に嫌われると思ったようで、許しを聞いてまた号泣してしまった。

泣き止まない優美子を抱きしめて慰めていると、お互い昂ぶってしまい、そのまま初体験を迎えてしまった。

事後に俺から告白して、優美子と恋人になった。

順番は間違えてしまったが、高校2年になった今でも俺たちは仲良く彼氏彼女をしている。

「今日も泊まるのか？」

「当たり前だし」

夕食後。俺たちは自宅のリビングにある大きなソファで抱き合っていた。

「毎週金曜は泊まるって決めてあるから」

「親御さんの了承は得てるんだよな？」

「当然だし」

「ならいつか」

「ひゃんっ！」

巨乳と呼ぶにふさわしい双丘のブラウス越しに鷲掴みする。

「あいかかわらず優美子のおっぱいは柔らかいよな」

「い、いきなり乱暴に……あつ、揉みすぎだし……んはあつっ！」

優美子のおっぱいは由比ヶ浜ほどではないが十分大きい部類に入る。

男子の夢が詰まった大きな果実をぐにぐに揉み続ける。

「じゃあやめる？」

「や、やめないで……うあつ、あああつ♡」

優美子の喘ぎに色っぽいものが混じり始める。

そんな彼女の嬌声をBGMに、俺の責めは徐々に激しくなっていく。

「んっ、んあつ♡ あ、あーしのおっぱい好きすぎだし……ひいあつ♡」

「好きだよ。ちゅっ」

「ひいんっ！ く、くすぐったっ……んうっ♡」

優美子の首筋を舐めながら、左手を胸からお尻に移動させる。

「んふうっ、だ、だめえ……ああああんっ♡」

弱点の首筋を舐められ、優美子の身体がガクガクと震えだす。

「もうイキそうなの？」

「ち、違うし……。そんなすぐにイクわけ……はああんっ♡」

「だよな」

より強い刺激を与えるため、ブラウスのボタンを外し、ブラを上にならずらして乳房を露出させる。

桜色の突起物はいやらしいほど勃起していた。

「ちゅぱっ」

「あああああつ！ ち、乳首だめえ……！」

左胸の乳首を吸うと、優美子がかぶりを振りだした。

口では嫌がっているものの、感じているのは明らかだった。

「こっちの乳首も気持ちよくしてあげる」

「くひいっ!？」

指先で右胸の硬く尖った薄桃色の先端を摘まむ。

「どんどん硬くなってぞ？」

「んひっ!? んああっ! ま、待ってっ……やめっ!」

「これでどうだ」

親指と人差し指で挟んだ乳首を押し潰すように、ぐっと力を込める。

「んひいいいいいっ♡」

歓喜の叫びを響かせながら、優美子が顔を仰け反らせる。

絶頂したようで、小刻みに身体を痙攣させている。

「イっただろ?」

「はあはあ……う、うるさいし……」

「口悪いな。そんな優美子にお仕置きだ」

息を切らしながら睨む優美子をソファから床に降ろす。上半身をソファに乗せ、お尻を突き出させる格好にさせた。そしてスカートを捲り上げると……

「きゃんっ!」

大きなお尻を平手で叩いた。

「ほら!」

「あぐっ! や、やめっ……あああっ!」

リズムよく優美子のお尻を両手で叩いていく。

力を入れていないが、徐々にお尻が赤く腫れていった。

「あれ？ 優美子、シヨーツに染みができてるぞ」

「っ……………」

気づけばピンク色のシヨーツに大きな染みができていた。

「まさかお尻叩かれて濡れちゃったのか？」

「ち、ちがつ……………」

「それじゃお漏らし？」

「それも違うし！」

粗相に対しては完全否定する優美子。

さすがにお漏らしだけは認められないようだ。

「それじゃなんで濡れてるんだ？」

「それは……………」

「素直に言わないと続きしてあげないぞ」

「……………意地悪すぎだし」

「俺が意地悪なのは付き合う前から知ってるだろ？」

前世は意地悪な性格はしていなかったが、泣き虫の優美子をずっと見ているうちに、俺の性癖は変化してしまった。

「お、お尻を……………叩かれて、濡れちゃった……………」

認めるのがよほど恥ずかしかったのか、涙目で優美子はスパンキングだけで感じたことを認めた。

「よく認めました。それじゃ約束通り続きしてあげる」

「あっ」

トランクスごとズボンを降ろし、逸物をショーツ越しに陰部に擦りつける。

「じ、焦らすとか最低なんだけど」

「そんなにこれ欲しいの？」

「……欲しいし」

「わかった。素直な優美子に免じてすぐに入れてあげる」

染みだらけのショーツを横にずらし、肉棒を濡れ濡れの陰部に宛がう。

「んふうっ」

「入れるぞ」

「あっ……んんっ！」

ぐつと腰を前に突き出すと、すんなりと肉棒が優美子の膣内へと呑み込まれていった。

「動かすぞ」

「ん」

優美子の返事を聞き、俺は腰を前後に動かしていく。

「あつ、んっ、んあっ♡」

「今日もいい締め付けだな！」

ペニスにぴったりと吸いついてくる優美子の陰部は、あまりにも気持ちよくて、つい抽送が激しくなってしまう。

「はあんっ♡ あひゃっ♡ そんなに激しくっ!？」

「そっちの方が気持ちいだろ？」

「そ、そうだけど……あつ、ああっ♡ 激しすぎだし……あはあんっ♡」

切ない表情をしながら優美子が振り返ってくる。

それがたまらなく、俺は欲望の赴くままに、何度も何度も優美子を突き上げる。

「こっちも気持ちよくしてやるからな」

突き上げるたびに揺れる大きな乳房を両手で鷲掴みにする。

「はは、まるで猿の交尾みたいだな」

「そ、そんなこと……んくっ♡ んひっ♡」

絶頂が近づいてきているのか、優美子の締め付けが強くなってきた。

「あつ、ああんっ♡ あんっ♡ も、もうダメっ♡」

「くっ……!」

肉壁が強く絡みついてきて強く締め上げてきた。

優美子の絶頂に近い証拠だ。

「俺もイキそうだった……！」

「あああつ♡ い、一緒に！ あーしと一緒にイツてっ！」

「わかってるよっ……！」

優美子におねだりされ、とうとう俺の射精感が限界に達した。

「で、射精……！」

「んあつ♡ あつ、あああああああつ♡」

がたまらず腰を突き出し、射精をすると、優美子は悲鳴のような声をあげながら激しく身体を痙攣させた。

さらに優美子のあそこは締め付けが強くなり、何度も射精を繰り返す。

「あんっ♡ だ、出しすぎだし……♡」

すべての精液を出し終え肉棒を抜くと、大量の子種汁が垂れてきた。

「嫌だったか？」

「まさか。あーしが嫌がるわけないじゃん」

「知ってた」

「ばか。それよりいつもの」

「あいよ。ちゅっ」

「んちゅっ」

俺たちはセックスが終わると必ずキスするようにしている。

理由はわからないが優美子のお願いで、身体の関係を持つてからずっとだ。

「ていうか、ソファがやばいんだけど」

「だな」

「だな、じゃないし！ 誰が掃除すると思ってるの!？」

「優美子」

「わかってるなら少しは自重しろ！」

「いたっ」

軽く拳骨されてしまった。

確かにリビングでセックスしたのは後処理のことを考えるとまずかったかもしれない。
い。

「それに今日はあーしのこといじめ過ぎだし……」

「そんなにいじめたっけ？」

「いじめたし！ 言葉責めとか、お尻叩いたりとか……」

「それは優美子が悪い」

「なんであーしのせいなわけ!？」

「優美子があまりにも可愛いからいじめたくなるんだよね」

「っ……………」

彼氏の嗜虐心をくすぐる優美子が悪いのだ。

「そ、そんなの卑怯だし……………」

「なんで？」

「う、うるさいっ！ それよりシャワー浴びたいんだけど」

「んじゃ一緒に浴びようか」

「そんなこと言って、浴室でもあーしを抱くつもりでしょ？」

「駄目？」

「……………駄目じゃないし」

浴室でもセックスをした俺たちだったが、二回戦で満足できるはずもなく、深夜までセックスに溺れた。

あーしさんが淫乱すぎて遅刻が確定した件

4月中旬。八幡が原作通り奉仕部に入部した。

八幡の従兄弟である俺だが極力原作イベントには介入しないつもりだ。介入したことで原作と違う展開になるのは避けたい。

「雪ノ下が俺のメンタルをゴリゴリ削ってきやがる」

今はこうして将来の彼女に対する愚痴を八幡から聞いて楽しむとしよう。

「今どき珍しいツンデレ美少女だな」

「デレはねえよ」

場所は八幡の自室。俺はラノベを借りるため学校帰りに八幡の自宅に寄っていた。

「それより今日は三浦の相手しなくていいのか？」

「今日は仲良し三人組で出かけてる」

「ほーん。確かに由比ヶ浜も部活に来てなかったな」

基本的に優美子と登下校をしているが、彼女に予定があるときは一人で帰ったり、八幡と遊んだりしているのだ。

遊ぶといっても二人ともインドア派なので、読書やアニメ鑑賞をするくらいだが

……。

「あ、思い出した。そろそろ鬼滅の刃を返してくれ」

「小町がまだ読み終えてないからもう少し待ってくれ」

「小町が読んでるのか。なら仕方ないな」

これで八幡だけ読んでるなら強制的に回収したが、小町なら仕方ない。

「ところで小町は？」

「友達と遊ぶから帰りが遅くなるそうだ」

「小町がいらないならここにいない必要はないな。帰る」

「おい。三浦に報告するぞ」

「……冗談だ」

優美子は束縛が激しく、嫉妬深い。従妹の小町相手でも嫉妬してしまう。

なので俺には女子の友達がほとんどいない。会話をするのも優美子と同じグループの由比ヶ浜、海老名くらいだ。その二人と話すときも優美子がいないと駄目だ。女子と二人で話すのはご法度らしい。

「彼女持ちも大変だな」

哀れみの目を向ける八幡。

確かに重たいと感じるときもあるが、それだけ愛されると思えば我慢できるのもの

だ。

「八幡の彼女も束縛激しそうじゃないか？」

「彼女がいたことないんだが」

「絢辻さんがいるじゃん」

「ギャルゲーじゃねえか……。しかも何年前の話してんだよ」

「俺は七咲が初カノだったな」

俺と八幡は中学生の時にアマガミにはまっていた。

八幡は絢辻さん、俺は七咲が推しヒロインだった。

6人の中から絢辻さんを選ぶとは、面倒な女が好みの八幡らしい選択だ。

「三浦に殴られるぞ」

「さすがの優美子も二次元には嫉妬しないだろ」

「三浦ならしそうな気がする」

「……大丈夫だ。でも念のため黙っててくれ」

もし報告されたらディスクが壊されそうな気がする。

「アニメ溜まつてるの消化しないといけないからそろそろ帰る」

「おう。気をつけて帰れよ」

「大丈夫。八幡と違って車に轢かれて長期間学校を休んでぼっちになったりしないか

ら」

「おい」

「それじゃまた明日」

八幡に睨まれながら俺は部屋を後にした。

帰宅途中に相模など数人の女子に囲まれてる葉山を見かけた。

葉山は俺が存在することで一番影響を受けている人物と言っても過言ではない。

なぜなら彼の近くに優美子がいないからだ。

優美子は俺に気を遣ってかわからないが、葉山たちのグループとはつるんでいない。

なので女よけがいない葉山は、学年関係なく女子たちから頻繁に告白や遊びの誘いを

受けているらしい。

今日も女子たちのお願いを断り切れず、渋々付き合っているのだろう。

「頑張れ葉山」

俺は葉山に合掌して帰路についた。

☆☆☆

翌朝。目覚めると顔がすぐ近くにあった。

頬をほんのり朱色に染めた優美子の照れ顔が。

「おはよう」

「うん」

「今日はどうしたんだ？」

「朝早く起きたから迎えに来た」

優美子はたまに朝食を作りに来てくれる。

ただお泊り以外で俺の寢床に潜り込んで隣で寝転んでいるのは珍しい。

俺は包み込むように抱き寄せられている。

「朝から誘ってるのか？」

「ち、違うし！」

「ならなんで？」

「……うなされてたから」

「ああ……」

原因は先ほど見ていた夢だ。

俺、八幡、葉山が三角関係になっている海老名さんが鼻血間違いなしの夢を見ていた。

「嫌な夢見ちゃってさ」

「ふうん。どんな夢だったの？」

「海老名さんが嬉しがる夢」

「……なら言わなくていいし。もう大丈夫？」

「大丈夫」

「ならいいし」

首の後ろに回した手でぎゅつと抱き寄せられた。

お互いの顔がくつつきそう。

「心配してくれてありがとう」

「んっ!？」

お礼にキスをした。

「……うっ、いきなりキスすんなしっ」

「いきなりじゃなかったらいいのか？」

「……うるさい」

もちろんこれぐらいで拳は飛んでこない。

怒った拍子に目の前のおっぱいが揺れる。

胸元の生地が乳房の弾力で退けられ、深い谷間が露わになる。

「なんでこんなはだけてるんだ？」

「そ、それはっ」

時計を見ると時刻は6時を過ぎた頃だった。

早朝にベッドに潜り込み、淫らな格好をして、俺を抱き寄せている。

「やっぱり誘ってるんだ」

「っ……」

「下着もつけてないようだし、誘ってるんだよな？」

ぐにっと潰れるように布からはみ出た乳が赤みを帯びていく。

まるで触ってほしいと訴えるように。

俺の熱い視線を受けて、優美子がピクツと身体を跳ねさせた。

「……好きにすればいいし」

「うん。じゃあ好きにする」

柔乳の谷間にグツと顔を押しつける。

頬に伝わる柔らかい感触。

ムニユムニユと弾力のある乳肉に頬をすり寄せる。

「はあ、あんっ、んふう……く、くすぐったいんだけど……」

熱い息を吹きかけながら、優美子がギユツと俺の頭を抱え込んでくる。

俺は優美子に快楽を与えるべく、乳首をギユツと軽く摘まむ。

「ふひいんっ!? はあっ、ああ、んっ、ああん♡」

敏感な乳首への刺激に、ビクンツと腰を跳ねさせた。

優美子が、腕にギユツと力を込める。

「んぐっ」

その拍子に、また強く胸へと顔が押しつけられる。

片手で乳首をクリクリと刺激しながら、もう片方の手で乳肉を強く揉みしだく。

「はうつ?! ひいんっ、あんっ、だめえ♡」

「駄目って好きにしろって言ったじゃん」

乳首を摘まみ上げながら、視線だけを優美子の方へと向ける。

「そ、そうだけど……あんっ、はあ、はううんっ♡」

乳房と乳首を刺激されっぱなしの今、喘ぐ合間に優美子が言葉を繋ぐ。

身体を何度も震わせ、乳首をコリコリと硬くしこらせながら、どうにか息を整えようとする。

「ダメ……そこっ、コリコリされるとっ……くひゅうんっ♡」

だめと言いながらも、優美子は俺を抱き寄せたまま、離そうとしない。

自ら快楽を求めてくるかのように、乳房を押し付けてくる。

「乳首が硬くなってるぞ?」

硬くしこった乳首を押し潰すように指に力を込め、肌に顔を押しつけたまま大きく息

を吸い込む。

「ひゃうっ!? はひっ、ふうっ、ああ……あふうんっ♡」

俺の問いかけに、フルフルと頭を振った優美子だったが、否定の言葉は口にしない。

「このまま好きにさせてもらうからな」

「わかつてるし」

自身の寝間着を脱ぎ、優美子のシヨーツを脱がせ、仰向けに寝転がる裸Yシャツの優美子の上に乗るかか。

「もうヌルヌルしてる。おっぱいだけでこんな濡らしたんだ?」

「ひいあっ♡ あんっ、んう……ひいんっ、うあっ♡」

「ほら、聞こえるか? 優美子のマン汁の音」

優美子に聞かせるように、結合部からグチュツ、グチュツと音を響かせる。

これだけ濡れてるといふことは、俺が寝てる間にオナニーをしていたに違いない。

「い、いいから早くするし……遅刻しちゃうからっ……んうっ♡」

「まだ6時だし時間は大丈夫だろ」

「朝食の準備がまだだし……はっ、はあ、あんっ、あひいんっ♡」

頭をふりながらも、優美子が足を腰へと絡めてくる。

「奥まで入れるぞ」

「くひいんっ♡ はあっ、はひっ♡ んああっ♡」

腰を突き出すと同時に、膣穴に溜まっていた蜜汁が、音を立てて溢れ出てくる。

「くう、あっ♡ ああ……奥っ、届いてるう♡」

引き締まっているけど柔らかい身体に乗りかかりながら、巨乳を両手で揉みほぐす。

指先が乳肉に食い込むほどの荒々しい愛撫にも関わらず、優美子は顔を蕩けさせ喜悅の声を漏らす。

激しく犯されることで、理性が少しずつ崩されていくのがハッキリとわかる。

「優美子はここを突かれるの好きだよな？」

乳肉を掴んだまま、コツコツつと子宮口を軽くノックする。

「んあっ、あひっ、んんっ♡」

突き入れに合わせて膣肉をうねらせ、キュツと絞めつけながら喜びを肉棒に伝えてくる。

「もつと突いて欲しい？」

「い、いちいち聞くなし……はあ、はうっ、んふうっ♡」

「優美子にも気持ちよくなつてほしいから。ほら、ここはどうだ？」

「ひやうっ♡ べ、別に普通だし……ああっ♡ ああっ♡ うああっ♡」

これから学校があるためか、平静を装うとする優美子。

「ふーん。それじゃ、これは？」

「きひいつ?! くひつ、あふつ♡ ああつ、んひいいんつ♡」

コツコツではなく、ゴツンツと重いノックを子宮口に与える。

ベッドの上で身体を跳ねさせ、俺にしがみつきながら、嬌声を放つ優美子。身体は喜悦に震えっぱなしになっている。

「ほんとに優美子は素直じゃないな」

「ひやあああああつ♡ ちよつと……ああ、引つ張りすぎだしいっ！」

揉みほぐしていた乳房を中央に寄せ、硬くしこつた乳首を口に含み、そのままグイツと引つ張り上げる。

お餅のように乳房が柔らかく形を変え、引つ張り上げられる刺激に、優美子が声を上げる。

俺は口に含んだ乳首を激しく吸いたて、舌でれろれろと舐め回す。

もちろん、その間も子宮ノックは続けていく。

「あつ、あひいつ♡ ど、同時なんて……反則だしっ！」

ついに、優美子が心の中の言葉を声に出してしまった。

「やっぱり気持ちよくなつてたんだな？」

「ひやあんつ♡ ち、乳首吸つちやらめえ……ああつ♡」

過敏な乳首を吸われる快感に、膣肉がギュツと締まる。

「優美子、気持ちいいんだろ？」

「き、気持ち……いいつ、オマンコの奥う……気持ちいい……んあああああつ♡」

「こうして突かれるの気持ちいい？」

「き、気持ちいいつ！ 突かれるの気持ちいいつ♡」

「乳首も気持ちいいか？」

「気持ちいいつ！ おっぱいも、乳首も、おまんこもつ！ 全部気持ちいいからつ♡」

快楽によって頭の中がふやけてしまった優美子が、俺に促されるようにして卑猥な言葉を口にする。

その言葉を聞いて、肉棒が跳ね飛び亀頭に熱い塊が集まり始める。

「ふあつ!? ふ、膨らんできたし……中で……ひいんつ♡ 大きくなってる……ああつ♡」

「このまま膣内に出すから」

膣肉の圧迫に耐えながら、性器と性器を密着させたまま、ひたすら奥に突きまくる。

「な、中で……出す!? 学校行くのに中でなんて無理だし……んひいんつ♡」

「駄目なのか？」

優美子を絶頂させるべく、乳首を口に含んだまま吸い上げ、腰の動きを速くする。

「んっ♡ んひっ♡ ああ、そんなっ……また同時にっ!? ああ、オマンコと乳首、ムズムズするっ……ああ、んひいっ♡」

乳首をくわえながら吸い上げると同時に、子宮口に亀頭を押し当ててる。

そのまま子宮を圧迫するように腰を突き出し、乳肉に指をめり込ませる。

「ああああっ♡ あひいっ♡ イイツ♡ だ、だめっ……頭の中っ、チンポのことしかあ

……考えられなくなる……あああっ♡」

理性が崩壊した優美子は思ったことをそのまま口にする。

密着したまま自らお腹を持ち上げるようにして、さらに肉棒を奥へと咥えこもうと腰をくねらせ、腰に絡みついた足にグツと力を入れていく。

「は、入るう……奥までえ、イクっ♡ もう我慢できない……気持ちいの我慢できないっ♡」

「イツていいぞー!」

「イクツ♡ イツちやう♡ チンポでマンコ突かれて、乳首ちゅうちゅうさされてイツちやうちやうっ♡」

優美子が絶頂することを俺に告げてくる。

「俺もイクぞー!」

子宮口に押し当てていた亀頭を、メリメリと少しずつめり込ませていく。

「うああ、ああっ♡ イクイクイクっ♡ イクうううううううっ♡」

ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュウウウツ！

子宮口にめり込んだ亀頭から、子種汁が噴出する。

「いひいつ♡ へあ……直接、出てるっ♡ 子宮に出てるう♡ んああああああっ♡」

子宮壁にぶち当たる精液の刺激に耐えきれなくなった優美子が顔を揺らす。

子宮を精液が満たしていくことに、種付けされていくことを強烈に感じるのか、膣肉はうねる動きを激しくし、貪るように肉胴をしごきたてる。

「まだ射精るぞー！」

ビュルルルツ！ ドビュビュウウツ！

「あひひひひっ♡ ひああっ♡ 出しすぎっ♡ ああああっ♡」

三日ぶりに優美子を極上のまんこを堪能した肉棒から精液が止まらない。

さつきまで中出しに拒否感を示していた優美子だったが、今は絡めた足に力を込め、自ら腰を浮かせながら、奥深くまで肉棒を咥えこもうとしている。

精液まみれにされながらも、発情し本能を剥きだした子宮は、俺のザーメンをすべて受け止めていく。

優美子は卑猥な叫びを放ち続ける。

射精されながらイク快感に溺れた顔は、発情した雌そのものだった。

「ふう……。射精しきった……」

射精を終えた肉棒を子宮内から抜き出すと、啜っていた乳首を離す。

「朝から乱暴にしすぎだし……」

蕩けた表情の優美子が俺を見上げながら言う。

「嫌だった？」

「嫌とは言っていないし……」

「だよな。もともと優美子から誘ってきたんだし」

「それでも激しすぎだし」

「激しいほうが好きだろ？」

「……好き」

淫乱モードの優美子はいつもの百倍は素直だ。

「それより優美子のせいで朝シャンしなくちやいけなくなったな」

「あ、あーしのせいなの!？」

「そうだよ。ほら謝って」

「っ……」

身体を貪られ、大量に中出しされた挙句、文句を言われてしまう優美子。

いつもの優美子なら怒るはずだが……

「ご、ごめんなさい……」

「なにがごめんなんだ？」

「あ、朝から……発情しちゃう、淫乱な彼女で……ごめんなさい……」

淫乱になると本来のマゾ体質が現れてしまう。

家族にも友達にも見せない優美子の本質。

「優美子、まだ時間あるしもう一回しようか」

「ふえっ!？」

おそらく優美子の被虐心は満たされているだろう。

涙を流しながらも、顔を蕩けさせて謝罪を述べた優美子を見ればわかる。

だがそんな優美子を見てしまったせいで、俺の息子は元氣を取り戻してしまった。

「で、でも朝食がまだだし……」

「朝食は優美子でいいや」

「なにをばか言ってるし……きゃあああああっ!？」

我慢できなくなった俺は強引に優美子を組み伏せた。

そのまま言葉だけ嫌がる彼女を犯しまくった。

様々な体位で彼女を絶頂させ、上下の口に精液を吐き出し続けた。

気づけば優美子は氣を失って、時刻は登校時間を過ぎていた。

あーしさんをいじめたくなつたので学校のトイレで喉奥を犯しまくつた件

昼休み。俺が所属する2年F組の教室は重たい雰囲気になっていた。

「あーしに言いたいことがあるなら直接言ってくんない？」

原因はクラスの女王である三浦優美子だった。

「う、うちは別に……」

その女王の餌食になっているのは相模南。

特技と趣味がなく、立場を気にする性分、ヘタレ体質というまったくいいところがない女子生徒だ。

「言いたいことあるんしょ？」

優美子が怒っている理由は、相模が優美子の陰口を言っていたからだ。

相模は1年時にトップカーストだったが、優美子がいる現在は2番目のカーストに甘んじており、それが気に入らないのだ。

気に入らなくても相模は優美子を怖がっているため直接言えず陰口をよく叩いているらしい。

その情報が優美子に入り、こうして相模を尋問しているのだ。

「いや、その……」

愛妻弁当を味わいながら二人の様子を見ているが、相模が言い返す様子はない。このままでは優美子に泣かされて終わりだろう。

「ちよつといいかな？」

もう少して食べ終えるところで葉山がやって来た。

「どうした？」

「三浦さんを止めてくれないか？」

この状況で優美子を宥められるのは俺しかいないのはわかっている。

クラス中の人たちが、優美子を何とかしてくれ、と目で訴えていたのも気づいていたが、愛妻弁当に集中していたかったので無視していた。

「……わかった」

俺の返答に葉山は「ありがとう」と頭を下げる。

「優美子」

「なに？」

俺が優美子に声をかけると、相模は救世主が現れたような顔つきになった。

「クラスの雰囲気が悪くなるから、怒るなら別の場所の方がいい」

「……わかった。相模行くよ」

優美子が相模の腕を掴んで教室を後にする。

連れてかれる相模の顔が死んでいたのが面白かった。

「これで無事解決だな」

こうして一人の少女の犠牲によりクラスの平穏は取り戻された。

ありがとう相模。

さようなら相模。

君のことは体育祭終了まで忘れない。

「いやいやダメでしょ!」

「なんだ由比ヶ浜?」

「解決になつてないから!」

「うるせえ! 今は愛妻弁当が優先だ!」

「なんでキレるし!?!」

優美子が朝早くから俺のために作ってくれたお弁当だ。

相模のために放置された愛妻弁当がかわいそうだ。

「とりあえずあたし行つてくる!」

由比ヶ浜がたわわに実つた二つの果実を揺らしながら優美子たちの後を追っていく。

葉山が何か言いたそうな顔を向けてきたが、無視して自席に戻り、昼食を再開した。愛妻弁当を食べ終えた俺は八幡のベストプレイスに足を運んでいた。

「今日もぼっち飯か」

「来るんじゃないよ」

「今日は風が騒がしいな」

「無風だよ」

今日の八幡はノリが悪い。おそらく小町と喧嘩でもしたんだろう。

「由比ヶ浜に聞いたぞ。三浦が誰かをいじめたらしいな」

「いじめじゃない。陰口を言われてたから問い詰めてただけだ」

うちのクラスにいじめはありません。

「それよりずいぶんと由比ヶ浜と仲良くなったな」

「同じ部活なだけだ」

「雪ノ下とも仲良しみたいだし、いい傾向じゃないか」

「それは完全にねえよ」

「でも優美子と雪ノ下って相性が悪いんだよな」

優美子は由比ヶ浜を巡って雪ノ下と口喧嘩をして、論破されて俺に泣き付いてきたことがある。

「確かにあの二人は水と油だな」

「まあ泣いてる優美子が見れるからいいんだけど」

「性格悪いなお前」

「好きな子の泣き顔って興奮しないか？」

「従兄弟の性癖なんて聞きたくないんだけど……」

そう言う八幡だが、由比ヶ浜をけっこう弄ってるので、俺と変わらない気がする。

八幡と駄弁つてると、戸塚と材木座も合流してきた。

戸塚も材木座も俺の友達だ。

戸塚とは教室でも話すし、たまにテニスの練習に付き合ったりしている。

材木座とはアニメを語り合ったり、彼の自作小説を批評する仲だ。

こうして四人で駄弁るのは、俺の好きな時間の一つである。

☆☆☆

放課後。俺は奉仕部の部室がある特別棟に来ていた。

「本当にここにするわけ……？」

不安げな優美子が問う。

俺たちがいる場所は奉仕部の部室ではなく、男子トイレの個室だ。

「そうだ」

「でも人が来たら……」

「特別棟だし大丈夫だろ」

なるべく人の来ないトイレを選んだが、誰かが入ってきてもおかしくない状況ではある。

「わ、わかった……」

「それじゃよろしく」

俺は洋式トイレに腰掛け局部をさらけ出した。

優美子が跪いて恐る恐る肉棒に顔を近づける。

「人が来たらやめるから」

「あいよ」

「本当にやめるから」

念を押すように同じことを二回言う優美子。

先ほどまで相模を問い詰めていた人物とは思えない表情をしている。

「……よし」

剥き出しの肉棒を掌で包み込む優美子。

肉棒を握ったまま手を前後に動かされる。

「優美子、上手くなったな」

「当たり前だし」

手コキやフェラチオを覚えて一年近く経つ優美子の技術は格段に上がっていた。

褒められた優美子は、肉棒に唇を被せていった。

「最初はいつも通りな」

俺にそう言われ、肉棒を咥えながら優美子が頷く。

「ちゅぶ、ぺろっ」

亀頭に舌を這わせて、たまに先っぽだけを咥え込むという単調な動きを繰り返させる。

「じゆる、ちゅっ、うううっ」

「いいぞ優美子」

肉棒を味わったからか、先ほどまで不安げだった優美子の顔は蕩けている。

「じゅぶっ、ちゅっ、かぶっ、もぐっ」

「んっ……。優美子、もっと気持ちよくさせてくれ」

「むぐっ」

優美子が肉棒の裏側を根元から舌を這わせる。

さらにカリの部分も丹念に舐め上げ、俺に快感を与えてくる。

「れろおつ、ぴちゃ、ぴちゃつ、んちゅつ」

優美子はここが男子トイレであることを忘れているかのように肉棒に夢中になっている。

俺はさらに夢中にさせるべく、肉棒を喉奥に突っ込ませた。

「んぐおっ!？」

「そろそろ喉奥まで欲しがると思って。ちゃんと味わってくれよ」

「ふあい、んぐつ、ちゃぶ、ちゅほ、むほお」

優美子が下品な音を立てながら一心不乱に肉棒をしゃぶりたてる。

その姿は、精液を欲しがる牝豚のようだった。

「おしっこおしっこー!」

「——っ!？」

あまり人が訪れないであろうトイレに、訪問者がやってきた。

来るとしたら八幡かと思っていたが、違う部活の男子のようだ。

優美子は思わず身体をビクツと震わせフェラチオを中断してしまう。

「優美子、続けて」

小声で優美子に指示を出す。

優美子が大きな綺麗な瞳でやめるよう訴えてくるが、諦めたようでフェラチオを再開する。

しかし、ばれてしまうという恐怖は感じているようで、ガタガタと身体が震えている。そんな優美子の姿に嗜虐心をくすぐられた俺は、片方の靴を脱ぎ、跪く優美子の局部を下着越しに足先で刺激し始めた。

「——んっ!? うううっ!」

予想外の責めに、優美子は泣きそうな瞳で俺を上目遣いで見つめ、首を横に振る。

「やめてほしい?」

俺の問いに可哀そうなくらい首を縦に振る優美子。

さすがに喘がれると男子に聞こえてしまう可能性が高いので、片足を元の位置に戻す。

代わりに優美子の右耳を指の腹で刺激していく。

耳も感じやすい優美子は、両目を閉じて必死に快感に耐える。

もちろんその間も俺の息子へのご奉仕も忘れない。

「んふっ、むぐっ、んぶうっ」

トイレに来た男子は3分ほどで出て行った。

「行ったぞ優美子」

「うぐっ」

「それじゃ次の生徒が来るまでに終わらせるか」

「ふぐ……？ んごおおおおおっ!？」

俺は優美子の頭を掴むと一気に肉棒を突っ込み腰を前後に激しく動かし始める。

「あ、がっ、じゅぼ、ぢゆるるるっ!」

「頑張れ優美子」

「ん、ぼおっ、じゅぞっ、じゅぼぼぼぼ!」

優美子は前後の動きに合わせて吸い付くようにする。

俺たち以外誰もいないトイレに下品な音が鳴り響く。

「もごほおっ! んごもっ! んごももおおっ!」

ガクガクと顔を揺さぶられ優美子の顔が赤色に染まっていく。

「そろそろ射精すぞ」

「ほごっ! んごおっ! んごっ……んごもおっ!」

絶頂するためラストスパートをかける。

「くっ……!」

「おぶうううううううううううっ!」

優美子の口の中に白濁をぶちまける。

優美子は必死に吐き出さないように堪えているようで、俺の足元で、ビクツ、ビクツと痙攣している。

「げほっ、げほっ、げほっ、げえっ！」

口から肉棒を抜き出すのが、優美子はしつかりと口を閉じている。

「口を開けて中を見せてくれ」

「んあ、あ……」

素直に精液にまみれた口内を俺に見せ付ける優美子。

「それじゃ全部飲んで」

「ごきゅっ！　んぐっ、げほっ、げえっ！」

精飲すると優美子が激しくむせ返った。

髪は乱れ、涙と鼻水で顔が汚れているが、そんな状態でも優美子は綺麗だった。

そんな優美子を汚したことに、俺は高揚してしまう。

「優美子ありがとう」

「……まだだし」

優美子を労うため頭を撫でようとすると、涙目の優美子が見上げてきた。

「まだお掃除してないし」

お掃除フェラのことを言っているのだろう。

確かにイラマチオの後はお掃除フェラをしてもらっているが、いつもより激しく喉奥を犯してしまったので、俺は切り上げようとした。

「優美子無理しなくていいんだけど」

「無理じゃないし」

「でもな」

「いいから。最後まで奉仕するし」

優美子が涙を拭くと、再び肉棒を咥えこんだ。

「じゅううう！ ずじゅう！」

数分ほどかけて俺は尿道に残った精液を吸いつくされた。

☆☆☆

お掃除フェラを終えると優美子がすぐに帰宅するよう促した。

男子トイレでのフェラに性的興奮を昂ぶらせてしまったようだ。

「あはあんっ♡ はひイイツ♡」

帰宅直後に自室のベッドに押し倒し、珍しく黒色の下着を身に着けた優美子を犯している。

「んあああつ♡　いっつ♡　いっつ♡　いっつ♡　いっつ♡」

優美子の局部はグチョグチョに濡れており、黒色のショーツは役割を果たしていなかった。

「あんっ♡　んふあああ♡　あはあああつ♡」

おかげで愛撫なしですぐに挿入できた。

ちなみに下着を身につけさせたままなのは、この新しい下着が俺に見せるために優美子が購入したからだ。

黒色の下着で優美子の妖艶さが増しており、俺の愚息もより元気になっている。

「優美子の膣内、凄いい気持ちいいぞ！」

「あ、あーしも気持ちいいっ♡　オチンポ気持ちいいっ♡」

俺を見上げながら優美子が隠語を発する。

淫乱になった彼女を満足させるべく、ピストンを速めていく。

「ひい、んくうああ♡　うあああああつ♡」

優美子も両足を俺の腰に回し、種付けを促していく。

「(ハハ)もっとうだ!?!」

「んひいんっ!?!　はひいっ♡　ひゃっ♡　く、クリ潰すの反則だしっ♡」

親指の腹で勃起したクリトリスを押し潰すと、優美子が喜悦の声を上げた。

「はウウツ!? くひイツ♡ んひインンツ♡」

グリグリとクリトリスを押し潰しながら、子宮口を突いていく。

優美子は軽い絶頂を何度も繰り返して、果てるのも時間の問題だ。

「あひいつ♡ へあつ♡ あ、あーし……もう限界っ! もう無理いつ!」

とうとう頭を振りだした。

そんな彼女につられて、俺の射精感も高まっていく。

「出してっ! 早く出してっ! あーし、イクっ♡ イツちやう♡」

「わかったよ!」

優美子のくびれた細い腰を両手でしっかりと掴み、子宮を貫く勢いで腰を突きだしていく。

「ひイツ!? あひっ♡ 壊れちやうっ♡ あーしのまんこ、壊れちやうっ♡」

「もうすぐ終わるから頑張れ!」

「んおっ♡ いひいつ♡ ひゃひいいつ♡」

優美子の嬌声はどんどん大きくなり、全身も痙攣しっぱなしになる。

そしてとうとう俺の射精感が限界に達した。

びゅるるるるるっ! どびゅうううううっ!

「ひゃああああああああああああっ♡」

いつの間にか下品な顔つきになった優美子が歓喜の声を放つ。

肉棒は膣内で元氣よく跳ね、次々と精液を放出させていく。

「あああつ♡ す、凄すぎだしい♡ あーしの子宮が精液だらけにいい♡」

種付けされる悦びに震える優美子。

「あうつ、お腹あ……熱すぎだしい♡」

「満足したか？」

「したけど……もっと欲しい」

「わかった。立てるか？」

「もちろんだし」

いったん肉棒を抜き、荒い息をする優美子を立たせる。

勉強机に両手をつかせ、お尻を突き出させる。

「んにいいいいいいいいっ!？」

一気に膣奥まで挿入すると、優美子が淫らな声を部屋中に鳴り響かせた。

すっかり発情した俺たちは夕食を食べるのも忘れて快樂に身を委ね続けた。

「引かないで聞いてほしいんだけど」

「どうした？」

二人で仲良く湯船に浸かっていると、優美子が切り出した。

「また学校のトイレでしてほしいんだけど」

「はまったのか？」

俺の問いに、恥ずかしそうに肯定する優美子。

「確かにスリルがあつて興奮したな」

「それもだけど、なんか背徳感があつてやばかつたし」

「なるほど」

本質がマゾな優美子らしい感想だ。

「男子がトイレに入ってきた時もそうだけど、近くの教室で結衣たちが部活してると思うと凄い興奮したし」

「優美子は変態だな」

「あーしを変態にさせたのはアンタだし」

「知ってる」

最初は週一ペースでセックスをしていたが、お互いどんどんはまっていき、今では優美子が生理以外のときは会うと必ずセックスをしている。

「だから責任とつてあーしを満足させて」

この日から特別棟の男子トイレでフェラをするのが俺たちのブームになった。

エスカレートしていつて、学校でセックスをする日も遠くないだろう。

雪ノ下に泣かされたあーしさんを慰めセックスしてあげる件

七月某日。俺は群馬県にある千葉村に来ていた。なぜ群馬県なのに違う県名を使っているのか疑問だが、千葉にも東京ドイ○村があるので他県のこととは言えない。

目的は小学生の林間学校サポートスタッフとして働くためだ。

参加者は奉仕部、俺、優美子、海老名、戸塚、小町の8人で葉山たちは参加していない。

目的地に到着して早々に優美子と雪ノ下が言い争いをしていたが、優美子の惨敗だった。

荷物を置くために本館に向かいながら泣いてる優美子を慰めた。

部屋に荷物を置いてすぐ小学生たちのもとに向かう。

原作と違い葉山がいないため、俺が小学生たちに挨拶することになった。

挨拶をスムーズに終わらせると優美子が蕩けた表情で俺のスピーチを褒めてきた。

俺の彼女がチョロすぎる件。

最初の仕事は小学生たちのオリエンテーリングに付き添うことになった。

八幡や雪ノ下には声掛けなどは期待できないので、それ以外の面子で「頑張れ」「生殺与奪の権を他人に握らせるな」など声をかけ、ボランティアのお兄さんお姉さんを振る舞った。

容姿が上の下（自己評価）の俺は気さくなお兄さんを演じれたようで、子供たちはすぐさま懐いてくれた。

意外だったのは八幡だ。

八幡はたまたまアニメ好きの男子に声をかけられ、『鬼滅の刃』の話題で盛り上がっていた。

途中で孤立している鶴見留美を見かけたが、声掛けはせずに静観することにした。

俺は原作の葉山と同じ過ちはしないのだよ。

オリエンテーリングの次は小学生たちとカレー作りだ。

まずは平塚先生が炭に火をつける手本を見せてくれることになった。

平塚先生は煙草を吸いながら手慣れた様子でスムーズに火付けを行った。

「平塚先生」

「なんだ惚れたか？」

「生徒たちの前で煙草はどうかと思いますよ」

「ぬっ」

「それに煙い女はモテませんよ」

「ぐはっ！」

俺は煙草が苦手なのでやんわり注意させてもらった。

「お前容赦ねえな」

「なにが？」

「平塚先生を見ろ」

八幡に言われ平塚先生を見ると、泣きながらどこかに行ってしまった。

「……だつて煙かったし」

「婚期逃してる女には言い方気をつけろ」

「わかった」

「んじや俺たち男子は火の準備するか」

「頑張れ」

「お前もやるんだよ」

「やれやれ」

八幡にそう言われ俺は軍手をはめて炭を積み、八幡と戸塚が着火剤と新聞紙の用意をする。

準備はさくさく進み、交代で団扇で仰ぐことになった。

10分ほどすると優美子が飲み物を持ってきてくれた。

「はい」

「ありがとう」

「ヒキオと戸塚も」

「悪いな」

「ありがとう三浦さん」

さすがおかん属性がある女だ。

飲みたいと思ったタイミングで飲み物を持ってきてくれるなんて、なかなかできることじゃないよ。

「つか顔が汚れてるし。こっち向いて」

「ん」

優美子はそう言うと、ペーパーを取り出して俺の顔を拭き始めた。

「戸塚も拭いてあげよっか？」

「えっ!？」

「冗談だし。ヒキオは結衣に拭いてもらいな」

「なんでだし」

「あーしの真似すんな」

優美子と八幡が仲良く喋ってるのを見るといまだに新鮮に感じてしまう。

それから優美子以外の女子たちがやって来て本格的にカレー作りが始まった。

俺たち中高生グループは順調に下ごしらえと米研ぎを終えたため、数人で見回って小生たちの手伝いをすることにした。

ここでも俺は鶴見留美に声をかけなかった。彼女は八幡に任せるのがベストであるからだ。

数分ほどして留美が八幡に話しかけてるのが見えた。

俺が介入して原作の流れが変わるか不安だったが、今回は原作通りの展開になりそう
だ。

「あんさー、一人気になる子がいるんだけど」

夕食を終えると優美子が切り出した。

「孤立してる子か？」

「うん」

俺の問いに頷く優美子。

「なんとかならないかなって思うんだけど」

「あなたでは無理よ」

「はあ!？」

優美子と雪ノ下の第2ラウンドが始まった。

俺が優美子を、由比ヶ浜が雪ノ下を宥め、話し合いを再開させる。

「やれやれ……」

「先生、煙草はダメです」

「うぐっ」

平塚先生が食後の一服をしそうだったのでそれを制す。

「とりあえず俺たちは奉仕部のお手伝いって感じなので、あとは先生たちに判断を任せます」

「……ふむ」

結局、留美を助けることが奉仕部の活動内容に含まれることを平塚先生に確認した雪ノ下の指示により、留美を助けることになった。

平塚先生は方針を決めることを俺たちに任せ、先に宿舎に消えていった。

先生抜きで話し合いをしたが、再び優美子と雪ノ下が言い争いをしたので、翌日に持ち越すことになった。

☆☆☆

「あーし、雪ノ下さん嫌い」

「はいはい」

時刻は22時。優美子に呼び出された俺は外に設置されているベンチで彼女を慰めていた。

「ぐすつ……。あーし、そんな悪いこと言つてないし……」

「そうだな」

右肩に乗っている優美子の頭を撫でながら肯定する。

「雪ノ下さんと同じ部屋じゃ寝れないし……」

「でも女子のバンガローは一つしかないし」

「あーしと一緒にここで寝よ？」

「虫に刺されるだろ」

「うっ」

虫よけスプレーをしているので短時間なら大丈夫だろうが、一晚過ごしたら虫に刺されまくるだろう。

「な、ならっ！」

「ん？」

「あーしを慰めて！」

「現在進行形で慰めてるんだけど」

まさか身体を慰めてほしいってか。

「身体で慰めて」

「ぶほっ!？」

本当に言いやがった。

「な、なに言ってるんだ!？」

「だって、くつついてたら発情してきちやっただし……」

「えー……」

「お願いっ」

「うーん」

「してくれたらなんでも言うこと聞くから!」

「……本当に?」

「本当だし」

「……わかった」

「ありがとうっ! 大好きっ!」

感極まった優美子が抱き着いてきた。

外ですることによって臆病になっていた俺だったが、巨乳を押しつけられたことによりス

イッチが入ってしまった。

「それじゃトイレ行こう」

「トイレ？」

「うん。あつちにトイレがあるから」

「ここでするんじゃないのか？」

「はあっ!? さすがにここは無理だしっ！」

「……ですよね」

さすがの優美子も青姦は選択肢になかったようだ。

俺は優美子に連れられ、多目的トイレに入った。

☆☆☆

「ここなら大丈夫っしょ」

「そうだな」

あーしは眼を閉じてそつと彼の顔に近づける。

「んっ」

軽い口づけを何度か交わし、半開きになった口内に舌を挿入された。

「んはあつ、ちゅっ」

舌を絡め、トロトロの唾液を混ぜ合わせながら、お互いの唇を貪る。

彼は唾液の交換をしながら、あーしのTシャツとブラを捲り上げてきた。

キスで気持ちよくなっているあーしは早く触ってほしくてたまらなくなっている。

彼の指先が乳首に触れた時、二つの突起物がツンとなっっているのがわかった。

キスだけで乳首を勃起させたことが恥ずかしかつたけど、そんな気持ちとは裏腹にオマンコがじゅん、じゅんと反応している。

あーしの身体は彼を受け入れる準備が出来ていた。

「あつ、んっ」

軽く揉まれただけであーしは声を上げてしまった。

いつもならこれくらいで声を上げたりしないのに。

きっとキャンプ場のトイレでしていることに興奮しているんだ。

「これくらいで感じてんだ？」

そう問われて、あーしは小さく頷いた。

ここで否定しても、彼に意地悪をされるだけだ。

「んあつ♡」

無防備な乳房を鷺掴みにされた。

彼はあーしの乳房や乳首をじっくり弄ってきた。

指に力を入れられるたびに、あーしの乳房が歪な形に変わっていき、それに比例して乳首は硬くなっていく。

「あんっ、ふあっ♡」

彼も興奮してきたようで、あーしを壁に押し付け、乱暴に胸を揉みしだいてきた。

付き合い始めは乱暴にされるのは嫌いだったけど、あーしの身体に夢中になっている彼が可愛くて、いつしか抵抗する気が起きなくなっていた。

「ひゃんっ!? 乳首、噛んじやらめえ♡」

いやらしいほど硬くなった乳首を甘噛みされる。

母乳も出ないので、噛んだり吸ったりを繰り返される。

なんか赤ちやんみたいで可愛い。

乳房と乳首を執拗に責められたあーしのおそこは、もう、びちよびちよだった。

「んくっ!?!」

ショートパンツを下ろされ、下着の布越しに彼の指が、いつたりきたりをする。

クリトリスが一番気持ちいいけど、あまり感じないところでも、彼に触れられると十分に気持ちいい。

「ああっ、やんっ♡」

布越しに擦られたり、指をぐりぐりさせて押してくる。

彼は下着を脱がさせないで責めるのが好きだ。

おかげであーしの下着はいつも愛液塗れになってしまう。

今日は替えがあるからいいけど、学校でこれをやられるとノーパンで過ごさないといけないので、まいつてしまう。

「ああああああんっ♡」

クリトリスを布越しに抓られて、あーしは軽く絶頂してしまった。

「も、もつとお……」

あーしはもつと気持ちよくなりたくて、足を少し広げる。

彼は下着をずらし、直接オマンコを責めだした。

最初は一本だった指が、二本、三本と増えていき、激しくあーしのオマンコを掻き乱す。

「ひいんっ、ひゃあああっ♡」

ぴちや、ぴちやと透明な液体が噴き出した。

あーしは両手を彼の肩に置き、かぶりを振りながら、必死に絶頂に耐える。

「んひいっ♡♡いっくっ♡♡いっくっ♡♡いっくっ♡♡」

彼はあーしが絶頂しても、潮噴きがおさまるまで、責めを止めてくれない。

あーしがどんなに懇願しても、彼の責め地獄は終わらない。

「やっと潮がおさまったな」

ようやく潮がおさまった。

彼の容赦ない手マンにより、あーしの膝はガクガクと震えて、今にもへたり込みそうになっていた。

「優美子、立ってるの辛い？」

「……うん」

「そっか。でももう少し頑張ってくれ」

「わかってるし」

彼は立ちながらするのが好きだった。

彼の部屋でも、浴室でも、学校のトイレでも、あーしは必ず立たせられる。もちろん正常位や四つん這いでもするけど、途中で必ず立ちバックなどを要求してくる。

彼はあーしが膝をガクガクさせながら、ピストンに耐えるのを見るのが好きらしい。

「あーしをいじめるの大好きすぎでしょ」

「うん」

爽やかな笑みに、きゅんっ、としてしまう。

きつとこれが恋愛補正なんだろう。

「そろそろ挿入してほしいんだけど」

あーしは彼に背を向けて立ち、壁に手をつけて身体を支えた。

彼はギンギンに勃起した肉棒を取り出す。

「うあつ♡」

あーしは彼の勃起オチンポに目が釘付けになる。

早くそれを挿入して、あーしをあそこをめちやくちやにしてほしい。

気づくとあーしはお尻を振って、いやらしく挿入を催促していた。

「優美子は本当に変態だな」

「う、うるさいっ。いいから早く入れて」

「あいよ」

あーしのおそこがトロトロだったので、すんなりと彼のものが入ってきた。

「あひいつ♡」

挿入されただけで、軽く絶頂してしまった。

彼はあーしの腰を掴み、何度も何度も打ち付ける。

「あつ、ああつ♡ いいっ♡」

浅く、深くを繰り返し、彼のペニスが出入りする。

「はひいつ♡ んひいつ♡ あはあつ♡」

グチュ、グチュ、といやらしい音をたててあーしのあそこが喜んでいる。オマンコに収まりきらない愛液が、結合部から溢れでて止まらない。

いやらしい液体の水たまりが床下に作られる。

「んああ♡ ああ♡ いい♡ あああああ♡」

彼はあーしのお尻を撫でたり、叩いたりを繰り返して、奥まで激しく突いてくる。

「あひいいん♡ ひやう♡ うはあ♡」

「そんな大声出していると人が来ちゃうかもよ」

「た、多分大丈夫だし……んおお♡ ああ♡」

頭の中が快樂に染まったあーしに、彼の忠告は性的興奮が増すだけだった。

「ひやうん?! おっぱいも♡」

彼は両手をおっぱいを揉みながら、さらに激しく突いてくる。

激しい責めにより、あーしの身体は限界寸前だ。

「ああ♡ あーし、もうらめえ♡ もうイツちやう♡」

「俺もだ!」

彼も絶頂しそうなことに歓喜する。

これで同時に絶頂できる。

「な、中に……出してっ! あっ、あああ♡」

「イクぞー！」

「んひやああああああんっ♡」

直後に、ドピュドピュ、とあーしの膣内に精液が放たれた。

次々に白濁液が注入され、あーしの子宮を埋め尽くしていく。

あーしは中出しされながら、再び潮を噴いていた。

「ふう」

種付けが完了され、彼のペニスが抜かれる。

抜け出たと同時にゴブツ、ゴポツ、といやらしい音が鳴った。

放出された粘り気のある精液と愛液が混ざり合った液体が流れ出てくる。

「あはっ♡」

中出しされた証拠を見るたびに、あーしはこの人のモノなんだと実感する。

それが嬉しくて、幸せで、たまらない気持ちになる。

「大丈夫か？」

中出しに興奮し、強烈な絶頂を味わい、ビクン、ビクンと身体を痙攣させるあーしに彼が心配そうに声をかける。

「うん、大丈夫。それより気持ちよかった？」

「当たり前だろ。優美子は？」

「気持ちよかったに決まってるし。あーしを見ればわかるでしょ？」
「そうだな」

彼はあーしを引き寄せ、しばらくその場で抱きしめあった。

☆☆☆

翌日以降も原作通りの展開が続いた。

河原で優美子やヒロインたちの水着姿を堪能したり、八幡が『みんなぼっちにさせる作戦』を立案してみんなを引かせたり、実際にその作戦を実行して留美がクラスメイトを助けたり、夜に多目的トイレで優美子とセックスをしたりした。

二日目以降の優美子は俺が慰めたおかげで、すっかり元気になった。恐らく雪ノ下とおっぱい勝負で圧勝したのが大きいと思うが……。

ちなみに二日目の夜は水着姿の優美子を抱かしてもらった。

「どっへ行ってたんだ？」

優美子とのセックスを終えてバンガローに戻ると八幡を起こしてしまった。

「夜空を眺めていた」

「ほーん」

さすがに彼女とセックスしてました、とは言えない。

「……悪かったな、嫌な役を押しつけちまって」

「別に構わないぞ。ラーメン奢ってくれたら」

「構うじゃねえか」

「冗談じゃないよ」

「冗談じゃねえのかよ」

くだらないやり取りをして俺たちはすぐに眠りについた。

帰りは優美子の父親に迎えに来てもらった。

車中で優美子はずっと俺の腕に抱き着いていた。

海老名さんはいつの間に撮っていた俺と八幡の写真を眺めて鼻血を出していた。

「ねえ、今度花火大会あるじゃん？」

「あるな」

「今年も二人でイクっしょ？」

「そうだな」

なんか行くの発音がおかしかったような……気のせいかな。

「今年も浴衣姿見せてあげるし」

「おう。期待してるよ」

「うん」

昨年堪能した優美子の浴衣姿を思い出し、俺はゆつくりと眠りの世界に旅立った。
自宅に着くと、なぜかトランクスがカピカピだった。

あーしさんがなんでも言うことを聞いてくれた件

今年の夏はセックスしまくりだった。

群馬の千葉村でセックスしたり、夏祭りでもセックスをしたり、海でセックスをしたりと優美子が生理以外の日はほぼ毎日していたと思う。

夏祭りでは八幡と由比ヶ浜に遭遇した。由比ヶ浜に絡んでいた相模を優美子が睨んで追い払っていたのは見ていて面白かった。八幡と一緒に行動するようお願いをしてきたが当然断った。

長い夏休みが終わると文化祭の季節がやって来た。

うちのクラスは演劇をやることになり、題材は『銀河鉄道の夜』だった。原作だと『星の王子さま』だったが変更になったのは海老名が『アクタージュ』を愛読しているのが原因だろう。夏休み明けからジョバンニとカムパネルラのカップリングが熱いと優美子たちによく言っていた。

主演の二人は葉山と戸塚で、俺と優美子は小道具担当だった。

仕事が少ないので楽に過ごせるかと思っただが、そんなことはなかった。

なぜか葉山からバンドのヴォーカルをするよう懇願され、断ろうとしたところ、優美

子にかっこいいところが見たいとおねだりされたので、引き受けてしまった。

さらに八幡にお願いをされて実行委員の仕事も手伝うことになってしまう。

相模が原作通りやらかして実行委員会の参加者が日に日に減少し、少しでも実行委員の負担を減らすため、俺に白羽の矢が立ったのだ。

これ以上忙しくなるのは勘弁だったけど、八幡が素直に他人に頼るのが嬉しくて、快諾してしまった。

「なんだかんだ面倒ごとを引き受けるところ、あーし好きだよ」

優美子に嬉しいことを言ってもらったせいも、気づいたら俺が実行委員長になっていた。

彼女をチヨロすぎとデイスってたが、俺が一番チヨロかった。

アニメ鑑賞や優美子とのセックス時間を減らし、俺は社畜のように働いて働いて働きまくった。

そのおかげで文化祭は何事も起きずに無事に閉幕した。

体育祭もなぜか俺が実行委員長になった。

文化祭で実行委員長をしたんだから、体育祭もよろしくね、と学年主任に言われてしまったのだ。

マジふざけんし。

この溜まりに溜まったストレスは優美子の身体で解消させてもらった。

「文化祭手伝ったんだから、今度はそっちが手伝え」

八幡経由で奉仕部にサポートをするよう依頼し、部活連中とひと悶着ありながらも、なんとか開催にこぎつけた。

相模の成長イベントをすべて奪ってしまったが、原作ではその後出番もなかったので問題ないだろう。

相模と言えば、ゲームセンターで弟と遭遇した。財布を落として困っていたので一緒に探してあげたら懐かれてしまった。

二学期はイベントが続く。体育祭の次は学校生活で一番の行事と言っても過言ではない修学旅行だ。

戸部が海老名に惚れているか気になったが、この世界ではそこまで絡んでいなかったため、奉仕部が戸部から依頼をされることはなかった。

旅行先の京都、奈良では優美子が四六時中べったりだった。

由比ヶ浜もべったりとまではいかないが、積極的に八幡にアピールしていた。

原作を全巻読破している俺には、見ていて辛い光景だった。

なお、旅行先ではホテルの非常階段で優美子とセックスをした。

夏休みが終わってもセックスしまくりの俺たちだった。

修学旅行が終わると、ようやくいろはすの出番だ。

この世界でもいろはすは女子たちから嫌われているようで、勝手に生徒会長の選挙に立候補されていた。

「今度は小悪魔系女子の後輩か。着々と面倒な女が周りを固めてきたな」

「なにそれ怖い」

「誠死ね、にならないよう気をつけろよ」

「なるわけないだろ」

原作8巻のイベントについては八幡からちよくちよく状況報告を聞いていた。

奉仕部の関係はぎくしゃくしていなかったので、展開が変わるかと思ったが、結局いろはすが生徒会長になった。

「一色が生徒会長とかこの学校終わりじゃないすかね」

「確かに頭が緩そうな学校だと思われそう」

「頭だけじゃなくて、股も緩そうですね」

相模弟は一色が苦手で、評価が厳しかった。

「まああいつなりに頑張るだろうから見守っててくれ」

保護者の八幡が俺と相模弟を諭す。

八幡も俺経由で相模弟と交流を持つようになっていた。

「これで自販機がいろはすだらけになったら面白いな」

「それありますね」

他人をネタにして話すのは面白かった。

でも場所を考えないと、誰が聞いているのかわからない。

「ふーん。先輩たち、私のことでずいぶん盛り上がってるようですね」

八幡を探していたいろはすに全部聞かれていた。

俺は快足を活かしてすぐに逃亡したが、八幡と相模弟は生徒会室に連行されていた。

翌日。相模弟が生徒会庶務（奴隷）になっていた。

いろはすの奴隷になったことにより、相模弟と八幡はますます親密な関係になるが、それはまだ先の話。

☆☆☆

12月12日。今日は優美子の誕生日だ。この日は土曜だったため一日中優美子とデートをした。

優美子が好きそうな恋愛映画を鑑賞したり、カラオケで普段は歌わないラブソングを

熱唱したり、可愛い彼女のために奉仕尽くしの一日だった。

「結局、今日もエッチするんだな」

「当たり前だし」

帰宅してすぐに優美子から求められた。

「久しぶりにアレしたいんだけどいい？」

「いいよ。今日は楽しませてくれたから、あーし何でも言うこと聞くし」

「やったー！」

許可を得たので、俺は高揚する気分のままに優美子を床へと押し倒す。

「きゃっっ！」

小さな悲鳴をあげた優美子の上に跨り、俺は肉棒を取り出した。

「服も汚していいよな？」

「……うん」

そして優美子の衣服を捲り上げて生の乳房をさらけ出させると、そのままゆっくりと、身体に体重を乗せて身動きを封じる。

覆うものがなくなった乳房は、重力に合わせて左右に広がり、柔らかさを視覚で伝える。

「それじゃ使わせてもらおうぞ」

そう宣言すると、形が崩れていないいやらしい乳房へと手を伸ばす。

「ふあああつー！」

乳房を掴み、谷間に肉棒を挟んで左右から強く力を入れて押し潰すと、優美子は甘い吐息を漏らし、嬉しそうに声を上げた。

「あいかわらず柔らかいな」

力に緩急をつけて乳房を揉んで、肉棒を押しつける。

「ああつ、やんつ♡」

「もう感じてんの？」

「だ、だって、乱暴に揉むから……んはあつ♡」

優美子が快感によがる一方で、俺も乳房の火照りと柔らかな肉の圧迫感を受けて、甘美な刺激に浸っていた。

「ああんつ♡ ひやあんつ♡」

パイズリの心地と優美子の喘ぎに俺はいつそう盛り上がり、腰を前後させるペースを上げる。

「ああつ♡ オチンポ凄すぎるしっ♡」

「なにが凄いんだよ。語彙力ないな」

「ご、ごめ……あひいいん♡ ふああつ♡」

ピストンに微妙に変化をつけて乳房を深くえぐり、亀頭と柔肉に包ませる。

「エラが引つかかるのいいっ♡ 硬くて熱くて……削られていっちゃいそうだしっ♡」

「パイズリだけでイクんだ？」

「んんうっ♡ こんなにオチンポ擦られたら、感じちやうからあ♡」

「知ってるよ。肌もどんどん汗ばんでるもんな」

水分のぬめりによって抽送がしやすくなり、摩擦の心地も絶妙になって、興奮で肉棒がより硬くなっていく。

俺はさらに腰の速度を上げて、同時に乳房へ指を深く食い込ませる。

「ふあああつ♡ 指が食い込んでえっ♡ んうっ、ひあああつ♡」

悶えよがる優美子の姿に昂ぶりが抑えられず、次第に射精感が高まっていく。

「おっぱい、オナホみたいに使われて嫌じゃないの？」

「嫌じゃないし♡ 気持ちよくなってくれたら、それだけで嬉しいしっ♡」

「……そっか」

「だから、あーしでいっぱい気持ちよくなってえっ♡」

優美子の一言が止めになり、一気に限界点に達する。

「優美子、ぶっかけるぞー！」

俺は射精を予告し、リズムよく腰を振り立てる。

「かけてっ！ あーしもイクから思いつきりぶっかけてえー！」

乳房と肉棒の擦過で優美子も絶頂が近づいている。

優美子の身体がブルブルと震え、淫乱な牝の顔で声をあげる。

「ひあああつ、イクううっ♡ オッパイ我慢できないっ♡」

「うおっ！」

「ひいああああああつ♡」

乳房の谷間から突き出した肉棒から精液が放たれ、顔面に降りかかると同時に、優美子の口から引きつった嬌声があがった。

「ちやんと飲んでくれよ！」

「あぶうっ!? は、はひいつ！」

パイズリだけで絶頂した優美子の淫乱さを愉快に思いながら、ぼっかり開いた口へ精液を放ち続ける。

「はぶうっ、むああつ！ んぐうっ！」

精液をかけられるのがよほど気持ちいいのか、優美子は顔をますます下品に蕩けさせる。

「ひいつ、んじゆるっ！ ごくっ！ んぶうっ！」

「凄いな」

優美子の顔や口元、胸もザーメンで白く染め、嬉しそうによがる彼女の姿は俺を喜悅させた。

「はひいつ♡ んんっ、ぷはっ……イツひやったしい♡」

射影を終えて一息つくくと、絶頂から抜けた優美子が、ぐったりと脱力しながら、甘い呻きを漏らした。

「優美子、下のお口にも欲しくない？」

「ほ、欲しいに決まってるしい」

「だよな。それじゃ」

「ふえ……?」

俺はその場で立ち上がり、呆けてる優美子を四つん這いにさせる。

スカートを捲り上げ、黒いショーツを脱がすと、トロトロになった性器があらわになる。

「いくぞ」

「あひやああああああっ♡」

愛液でしどに濡れた膣穴に肉棒を根元まで一気に突き入れると、優美子は背筋を弓なりに突つ張らせてきた。

「あああっ……♡ 一気に奥まれえ、気持ちよすぎるしい……♡」

「優美子がエロすぎて興奮が全然収まらんから覚悟してくれよ」

俺はそう言い、腰を動かしてペニスを抽送させ始める。

「んあああつ♡ すごいいいつ♡ これっ、すぐにイッちやうからあつ♡」

「駄目だ。俺がイクまで我慢してくれ」

「ひいつ、そんなあつ……無理だし♡」

「無理じゃないつて。ほら、もっと絞めつけて」

「あひいいいいつ♡」

軽くお尻を叩くと、膣穴が窮屈に窄まり、肉棒が圧迫される。

「うあああんつ♡ あううつ♡ お尻叩くのダメえつ♡」

「なら頑張つて締め付けてくれ」

「あぐうううつ!? あんまりオマンコ締めると、あーしも気持ちよくなっちゃうからあ

……」

尻を叩き続けると、優美子が涙目で訴えてきた。

「今日はなんでも言うこと聞いてくれるんだろ?」

「ひいうつ、うううつ……! わ、わかったあ……頑張つてオマンコ締めるからあつ……

!」

軽く追い込むと、優美子は再び力みだし、先ほど以上に膣穴を絞めつけてくる。

「むひいつ、あううつ♡ んああつ♡ オチンポおつ、中で擦れてるうつ♡」
「お、いいぞ優美子！」

肉棒に伝わる肉感がいい具合に増して、下腹部が蕩けるような心地に包まれていく。
「ひいいんつ♡ あぐつ♡ オマンコ気持ちいいけどおつ、今はだめえつ……！」

優美子は肉悦に悩ましく喘ぎながら、感じすぎないように耐える。

俺はそんな優美子をいじめるため、抽送の速度を上げる。

「んはあつ♡ 速いのはつ……！ こんなの無理だしいつ♡ イクの我慢できないいつ……！」

「イツたら中出ししないからな」

「そんなあつ!? やあつ、ほんと無理だからっ！」

無慈悲にピストンの速度を上げられて、優美子は快樂に心折れ、泣きそうな喘ぎをこぼす。

「ひいううつ♡ イクのダメえつ♡ あひいつ、イツちやダメなのについて！」

ピストン速度をさらに上げると、優美子は派手に嬌声をあげ、身体を引きつらせる。

「ひいいつ♡ もうイかせてえつ！ あーしをイかせてよおおっ！」

「だめだ」

「んぐううつ！ ああんつ♡ お願いだからあつ！ むひやああつ?！」

ピストンをするたびに揺れていた乳房を鷲掴みすると、優美子が色気づいた悲鳴をあげる。

「んひいっ！ おっぱいもだめえっ！ もう無理だからあー！」

偉そうに優美子に命令をしている俺もそろそろ限界が近づいてる。

「……わかった。俺もそろそろイクからもう少し我慢してくれ」

「もう少しして!?! あーし、もう限界っ！ もう無理いっ！」

「もう少しだから頑張れ！」

ピストンにスパートをかけ、下品な粘着音をたてながら、荒々しく膣穴を食っていく。

追い詰められている優美子は、頭を大きく振り、喚いて唾を散らす。

「イクうっ！ イクううっ！ んああっ！ んおおおっ！」

「優美子頑張れ！」

「ふぐううっ！ は、早く出してええっ！ ひいっ、イクうっ ♡ 早くあーしに種付け

してええっ！」

膣穴の強い締め付けに射精感が最大限まで達する。

「よし、射精すぞ！」

「あひいひいひいひいひいひいっ♡」

膣穴を一気に埋め尽くすほどの勢いで射精が施されると、待ち望んでいたアクメに優

美子は淫らな声を響かせた。

「んおおおっ♡ 子宮、精液熱いのきてえっ、イッてる♡ あーし、イッてるうっ♡」
耐えに耐えてからのアクメに身体を淫らにくねらせ、恥も外聞もなく乱れ狂う。

「優美子は射精が終わるまで何度も何度も喘ぎ、身体を痙攣させた。」

「あへえっ……♡ ううん……ふあ……♡」

ようやく優美子もアクメから解放され、こわばらせていた全身を弛緩させていった。

☆☆☆

「あーし、今日はもう限界……」

帰宅してから二時間ほど身体を交えた俺たちは身体を温めていた。

俺の脚の間に髪を束ねた優美子がすっぽり入り、同じ向きで湯船に浸かる。

「え？ 風呂上がりしないの？」

「もう勘弁してほしいんだけど……」

「でも今日は好きにしていんだよな？」

「うっ……」

俺の指摘にたじろぐ優美子。

「お風呂でも3回したんだからもういいっしょ!？」

「優美子が可愛いから何回でもいけるぞ」

「っ……」

一年以上優美子を抱えているが、性欲は増すばかりだ。

「そ、それは嬉しいけどさ……でも、あーしにも限界つてものが……」

「限界を超えた優美子が見てみたい」

「泣き叫ぶあーしを見たいだけっしょ?」

細い目で俺を見つめてくる。

「まあな」

「あーしをこんなに虐めるのアンタだけだし」

「嫌だ?」

「い、嫌じゃないけど……」

「優美子、DMだもんな」

「う、うるさい! 誰があーしをそうさせたし!」

俺のせいだろうけど、イベントのたびに優美子を泣かす雪ノ下と川崎にも少なからず

原因はあると思う。

「それに……こんなあーしを見せるのはアンタだけだからっ!」

「知ってる」

クラスの女王に君臨する優美子のはしたない姿を見れるのは俺だけだ。

優美子が隣に引越してきたときはビビったけど、時間をかけて幼馴染から恋人になれてよかったと思う。

俺、ガイルには魅力的なヒロインが大勢いて、推しはめぐり先輩だったが、今ははつきりと言える。

推しは三浦優美子だと。